

本誌8月号で大名の江戸藩邸について話をしたので、今回は国元の居城について話をしよう。現在、弘前市では2011年の「弘前築城四〇〇年祭」に向けて盛り上がっているが、今回紹介するのは八戸藩二万石の八戸城の話。

八戸城といっても市民以外にはピンと来ないかもしれない。現在の三八城公園



江戸末の八戸城

(文久改正八戸御城下略図：八戸市立図書館蔵)

江戸後期になると、八戸沿岸にも外国船が頻繁に出没。八戸藩でもこれを理由に、館造りの居館を正式に「城」に改築したいと幕府に何度も

周辺にあったのだが、石垣や天守などの施設を備えない館づくりであったため、「城」らしくはない。現在は堀も埋め立てられ、あまり原型を止めていない。実際に江戸後期までは、幕府から公的に「城」と称するのを許可されていなかった。

この「館」が天守や櫓を揚げ石垣を築いて「城」として整備する計画があった。

内願書を提出した。しかし新規の築城は「武家諸法度」で厳しく規制され、容易に許可されなかった。

事態が急変したのは、天保9年(1838)、藩の婿養子に幕府と姻戚関係にある西国の雄藩、鹿児島藩出身の信順が決定した時である。ここにおいて八戸藩は一気に家格上昇を果たし、幕府から「城主格」として認められ、居館も「八戸城」

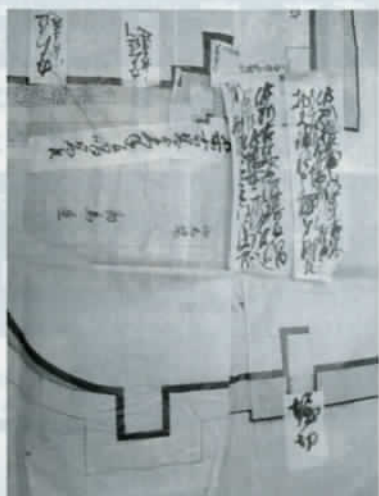
## 幻の八戸城築城計画

中野渡 一耕

(県民生活文化課 県史編さんグループ 主幹)

と称するのを許された。翌年、藩主南部信真は軍学者中里弥右衛門に命じて、築城のための素案を提出させている(八戸市立図書館蔵「御城御普請向何之覚」)。それによると、①本丸を石垣化し東南の角に三階櫓(天守に相当)を揚げる。②本丸の正面は枳形(二重の門)とし、堀を巡らせる。③二カ所に二階櫓、一カ所に

に太鼓櫓を揚げる。④土居(土塁)の改修、⑤堀を全面的に浚渫、防御上土橋を毀して、堀を通す、などとなっている。三階櫓の平面は四間×四間半(二間間約1・8)。これは現存する弘前城の天守(五間×六間)より一回り小さく、小振りなものであった。八戸市史編纂室には、八戸城改築を想定した絵図も残る。さて、この築城計画、どれだけの実効性を持っていたのであろうか。土居の改修などは確かに軍事的役割を強化したのと言え、すでに外国船が頻出する時代にあって、砲台の整備な



八戸城の改築計画図(大手周辺)。付箋が色々貼られている(八戸市史編纂室蔵接待家文書)

どの計画もなく、縄張りの大きな変更もない。どちらかというと、大名としての威信の強化を重視したもののようだ。しかし、築城には多額の資金がかかる。幕府に正式に申請が出された形跡もなく、まもなく幕末の混乱期を迎え、着工には至らなかった。全国的に見ても、幕末期に実際に築城したのは、戦略的な拠点であった北海道の松前城(松前藩)や五島列島の石田城(五島藩)など、僅かしかない。現在、かつての八戸城址には、幻に終わった天守の代わりに10階建の八戸市庁舎が市民を見下ろしている。